

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 78 号

平成20年10月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ウィリアム・バークレー

「希望と信頼に生きる ウィリアム・バークレーの1日1章」

（柳生直行訳・ヨルダン社）より（5）

4月10日 「ノー」

ものを頼んだときに相手が本能的に「ノー」と言うかどうか
これは人をためすいい方法である。

男も女も含めてすべての人間は二つのグループに分けることができる。助力を求めた時に本能的に「イエス」という人たちと、本能的に「ノー」という人たちである。一緒に仕事をする同僚をわたしが選ぶとしたら、まずたずねたいと思うのは、学位や免状や学問的業績ではなく、「世話好きの人かどうか」ということである。

そばにいてくれたらいちばんありがたい人間は、ものを頼んだらすぐに「はい」といつてくれる人間である。

だが、わたしたちは往々にして同胞である人間に対しても「ノー」というばかりでなく、神に対しても「ノー」という。これは人生に悲劇である。わたしたちは良心がある方向を指示しているのを知っている。心の奥底ではなにかをしなければならないことを知っている。にもかかわらずしばしば「ノー」といつてしまうのである。

これは祈りの際にも起ることである。

祈りの用い方を全く誤っている人が多い。彼らは祈りを逃避の手段として、わが身に起りそうなことを何とか避けるための方途として、使おうとする。彼らの祈りにおける態度は、意識的たると無意識たるとを問わず、つねに、自分たちの都合のいいように神の心を変えさせようとする、そういう態度である。

これを裏からいうとこうなる。たいていの場合、その人に向かって「ノー」というのが正しい、そういう人がひとりいる。それは自分である。「だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨てなさい」とイエスは言った（マタイ 16・24）。それは自分に「ノー」といいなさい、ということである。

新英訳聖書は、このところを大変うまく訳している。「わたしについてきたいと思うものは、自我を後ろに置いてこなければならぬ」。

わたしたちは助けを求める人びとに、「イエス」といい、私たちの生にかかわる神のご計画に対して「イエス」といい、自分に対しては「ノー」といえるようにならなければならない。

4月11日 早起き

ジョージ・ジョンストン・ジェフリー...は、立派な聖徒で、敬虔な信仰の持主であった。彼の勧告はきわめて実地的なものである。彼が大変好んだ聖句 彼はこれを2回引用している は、「お前は朝に向かって命令したことがあるか」(ヨブ記 38・12)であった。彼はこの聖句をもっぱら実的に用いている。「わたしはよく考えた上でいうのだが、いい説教をするのにいちばん役立つのは早起きの習慣である」と彼はいう。

時間に関する限り牧師は全く自由である。それだけに時間を浪費する危険もいちばん大きい。

勤め人はきまった時間に机の前にすわっていなければならない。工員もきめられた時間に仕事台や機械の前に立っていなければならない。しかし牧師の場合は、特定の時間に仕事を始めるよう彼を強制するものは何もない 彼自身の良心を除いては。事務員や工員と同様、牧師もまた仕事を始める時間について厳格でなければならない。

牧師はだれに呼ばれてもすぐに出かけていかななければならない。8時間労働なんていうものではない。24時間労働である。

急いではいい仕事はできない。

ジョンストン・ジェフリーはチャーサーのことばを引いている。

急いでやってもいい仕事をする

職人も居る。だが実を言えば、

それは暇のあるときに限るのだ。

説教とても同じこと、時間ぎりぎりになってでっち上げるわけには行かない。...

「お前は朝に向かって命令したことがあるか」

「イエス！と答えられる人は幸いである。」

4月13日 広告

クリスチャンは万人に知られかつ読まれる生きた手紙、公開状であり、またキリスト教のための広告である（コリント第 1,3・2,3）。

われわれは、人びとがわれわれの良きおこないを見て、天にいますわれらの父をあがめるようになる、というふうに生きなければならない（マタイ 5.16）。

クリスチャンの生き方こそがキリスト教のただ一つの効き目のある広告である、というこの要請にわれわれはどうしたら応じられるのか。

広告は、ある主張を行なうものである。

キリスト教は、安息と喜びと平和と力を与える、と主張する。われわれは自己の生活のうちに、ノン・クリスチャンの持っていないような、落ち着いた晴朗さ、輝くばかりの幸福、人生に対処しうる力、を持っているだろうか。それとも、普通の人間と同じように、心配・不安になやまされ、いつも憂うつで不平をこぼし、いつ挫折するかわからない、といった調子であろうか。

ほかの人間と違ったところがなかったら、だれもキリスト教を求める気にはならないだろう。

広告は比較を行なうものである。...

・・・宗教の価値を決めるのは、それがどういう人間を作り出すかということであって、これ以外に判断の基準はないのである。

広告は何かを約束するものである。...

あなたはイエス・キリストのためにより広告塔になっていますか。

4月20日 偉大な人物

(イギリス貴族の中で最も偉大なものの一つのノーフォーク家の当主のノーフォーク公が、下女として働くためやってきたアイルランド娘に駅で出会い、身分を明かさないうまま、彼女の荷物を城まで運んだ話を紹介したあと、)

人をその外貌によって判断するのは危険である。

偉大な人物はつねに思いやりのある人である。

物を与えるにももらうにも優雅さがある。

ほんとうに偉大な人物は自己の地位や名声を考えない。

自分を偉い人間だと考えるのは小人だけである。

おれは重要な人間だと考えるのは、つまらない人間だけである。
おれはほんとうはもっと高い所に居るはずなんだ、とぐちることくらい、確実に小人物たることを証明するものはない。また名声を求めることくらい誤った動機はない。

要するに、真に偉大な人物にとっては、屈辱的な奉仕というものはないのである。

だれかを助けるためだったら、どんな仕事も面子(めんつ)にかかわるというようなものはない。

弟子はその師のようになれば、それで十分である。イエスに眼を注ぐものは、愛の奉仕こそこの世で最も美しいものであることを見てとるはずである。

4月21日 学び・光・笑い

(ある朝、私の車のトランクに、カール・バルトのピリピ書注解とA A道路案内と漫画が置いてあった。この取り合わせが、同乗していた私の友人には、愉快だったらしいことを述べた後、)

しかし、この取り合わせは別に間違っていない。なぜならそれは人生における3つの必要をあらわしていると思われるからである。

第1は、学ぶべきもの。そこにはカール・バルトのピリピ書についてのすばらしい本があった。聖書のもっともおどろくべき特徴は、それを長く研究すればするほど、益々面白くなってくる…。

わたしがトリニティ・カレッジに入学したのが1929年、つまり聖書の研究、とりわけ新約聖書の研究が、33年間にわたる主要な活動だった。それでもなお、知るべきこと学ぶべきことが山ほどあり、興味津々たる問題も尽きることがない。わたしなぞそのへりに一寸さわっただけのことであって、まだ全然勉強していないことが無数にある。聖書には、なにか無限性とでもいったようなものがある。

第2にわたしを導いてくれるもの。

そこにA A道路案内があった。それはわたしの知らない土地でわたしが迷子にならないように助けてくれる。わたしたちを導いてくれるもの それはわたしたちにとってなくては成らないものである。

私たちを導いてくれるものをいくつかわたしたちは与えられている。まず神の書がある。次に、私たちの尊敬する人たちの模範、勧告、ときには警告、譴責がある。教会での交わりがある。私たちの参与している伝統がある。それにわたしたちの中から語りかける良心の声がある。

第3はわたしを笑わせてくれるもの。

ジェーンの漫画本があった。気晴らしなぞ入らぬという人は一人もいない。

学びと導きと光と笑い よく釣合いのとれた、みのり多き人生は、この三つのものを必要としている。

4月23日 人格的触れ合い

人生に大きな相違をもたらすものがいくつもある。

われわれは人格として扱われることを願う。

われわれは人々がわれわれに関心を持つことを願う。

われわれは人々に覚えられることを願う。

レストランに入っていくとウェイターが覚えていてくれたとか、ウェイトレスがまるで友だちが帰ってきたとでもいうように、にこやかに迎えてくれたとか、こういう経験は実に楽しいものである。一度紹介されて、それから二度目に会ったとき、相手が全然おぼえていてくれない　これはなんとも情ない経験である。

自分の好き嫌いをおぼえていてもらいたいと願う。

ちょっと注意すれば避けられるのに、うっかり人の神経にさわるようなことをついやってしまう　悲しいことだがわたしはこのことをよく知っている。そういうことをしないためには思いやりが必要なのであって、思いやりというのはおそらく家庭道徳・社会道徳の中でいちばん大事なものではないかと思う。

イエスが二人の人間を同じに扱ったことは一度もなかった。個々人に対してそれぞれ個性的な近付き方をしたのであって、彼にとってはひとりひとりがみな違った人間であった。ひとりひとりが人格であった。

イエスのうちに人格的触れ合いを見なさい。あなたも行ってそのようにしなさい。

4月24日 時計

善い人間といい時計とは、じつによく似ている。

時計は時間を数える。賢人も然り。

「われらにおのが日を数えることを教えて、知恵の心を得させたまえ」(詩編 90・12)どんなに長い一生でも時間は短い。時計のように、われわれは時間を数えるべきである。

時計は正確に時間を守る。有用な人間もまた然り。

人を待つためにどれほど多くの時間が浪費されることか。「時間を守ることは王者の礼儀である」といった人がいる。時間を守らないのは非礼である。自分の時間をむだにするのもいけないが、他者の時間を浪費するのはもっと悪い。

いい時計はよく調整され、進みも遅れもしない。賢人は急ぐことも立ち止まることもしない。 急がず騒がず、さりとして遅れももたつきもせず、着々と自分の仕事をやっていく。

時計はなかにぜんまいをもっていて、これが時計を動かしている。賢人もまたなかに力を持っている。

「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストがわたしの内に生きておられるのである」(ガラテヤ 2・20)賢人の秘訣はキリストの霊を心のうちにもつことである。

時計は自分で自分のねじをまくことはできない。同様に、善人の生は自分自身の力や方法からは出てこない。

彼の靈感はキリストである。キリストの力のうちにあって生きる。

時計は、こわれたとき、これを作った人の手元に戻されなければならない。

われわれも生涯を通じてそうである。人生がうまく行かないとき、われわれが道を踏み外したとき、われわれは神のもとに戻るほかはない。そうすれば神は我々を許し、われわれを修理して、将来もっとよい働きが出来るように、送り返してくださるだろう。

4月30日 貸方

半世紀にわたる生涯を送ってきて、貸し方に属するものといえば、前よりも思いやりの気持ちが増してきた。

半世紀も生きてくれば、人生がいかに誤りやすいかがよくわかる。だからいまは、誰かがあやまちを犯した場合、わたしはその人を非難するよりも、ジョージ・ホワイトフィールドとともに、「神のお恵みがなかったら、自分も同じことをやっていただろう」というほうに気持ちが傾いている。

悲しみや苦しみを知らずに半世紀を生きてくることはできない。自分自身悲しんだことのある人間は、いま悲しんでいる人たちをよく助けてあげることが出来る。すぎ去った年月は思いやりのこころを運んでくれる それは決して小さな贈物ではない。

前よりも寛容さが増してきた。

...神にいたる道はわたしが見出したもののほかに、まだたくさんあるのだ、ということ認める気持ちが前よりもずっと強くなっている。

年月の経過とともにものごとの正しさについての確信がうすれることはない、とわたしは思う。だが、自分だけが正しくてほかのものはみんな間違っているという確信は、年とともに薄れてくる。

自分のやる仕事をよく選ぶようになった。昔のようにたっぷり時間はない、だからほんとうにやらなければならないことだけを集中的にやらねばならぬ、ということをつぶし潜在意識的に感じとるのだろう。年とともに均衡感覚が増してきて、なにが重要か、なにが重要でないかがよく見えるようになってくる。

年をとるにつれて、時間を敵としてではなく、友として見るようになる。というのは、落ち着いて借り方と貸し方をそれぞれ合計してみると、ふしぎなことに、時間はそれがわれわれから奪ったと同じくらいのを、いやそれ以上に多くのものを、われわれに与えていてくれるからである。

5月2日 交わり

別に何ごとも起こらない日常の平凡な生活にあって、神とのこの親しい交わりはどのようにして保たれるのか。

毎日神のことばを聞かねばならぬ。

日々神のことばにおもむいて、それが自分になにを語りかけているかを知るのはよいことである。というのは、必要にせまられたとき、それまで美しいことばとして知っていた神の約束が、突如現実的な力としてあらわれてくるからである。

毎日神に語らねばならぬ。

神に祈らない日が一日たりともあってはならない。祈りは永遠の世界を時間の世界に近づけ、神を人間的状況の中へと連れ出してくれるのである。

神を思いまた覚えねばならぬ。

そのためには、毎週、神の民とともに神の家で神を拝むのがいちばんよい。そして、神の日（聖日）を、神を思いまた覚える日とするのが、いちばん望ましい。

人生に挫折した時、慰めを必要とするとき、家族のだれかが死んだ時、そんなときだけ教会へ行けばいいと考えている人がたいへん多い。

危機や緊急の時だけ神を呼べばいいと考えている人も多い。そういう考えの人たちに対しても、教会と神は失望を与えるようなことはしないだろう。

毎日神と歩いていれば、暗黒の日に神を見出すことがずっとやさしくなる。また、毎日神に語り神に聞き、毎週彼を思い彼を覚えているなら、苦難の日に神を呼ぶこともずっとやさしくなる。